

林羅山の思想―その「朱子学」と日本近世の諸思想への態度に注目して―

修士論文要旨

総合科学研究科総合文化学専攻 地域文化リノベーションプログラム

G0220010 李春潤

本論文は、林羅山の思想を研究の対象とし、朱熹、王陽明などの中国儒学者の思想と比較しながらその思想の特質を把握しようとするものである。また、本論文は日本の近世社会と羅山との関係を論じ、日本近世における朱子学の位置と意義とを検討する。日本近世思想史の論文であるが、比較研究法を用い、羅山と朱熹・王陽明の異同を探り、宋明時代と江戸時代との社会のあり方の相違にも注目する。東アジアの朱子学を視野に入れる研究であるといえる。本論文は、羅山の文章に基づいて分析を行い、先行研究を検討し、羅山の思想の展開と発展変化を明らかにし、羅山の思想の特質を明確にした。

序章の第一節は生家と修学である。羅山の生家と修学の過程を述べ、階級と政治思想の関係を強調した。第二節は幕府仕官である。羅山が江戸幕府に出仕する過程を述べ、羅山の仕事、羅山と幕府政治の関係を論述した。

第一章は、林羅山の理気論である。理気論における「本体論」と「理気の関係」に注目し、朱熹の「理本論」「理気二元論」、王陽明の「心本論」「理気一元論」と比較しながら、羅山の理気論を二つの時期に分けて研究した。羅山の前期理気論は朱熹の「理本論」に通じるが、王陽明の「心本論」をも認めているようである。また、王陽明の「理気一元論」に賛成し、朱熹の「理気二元論」を批判していた。寛永七年（一六三〇）を転換点とし、羅山の後期理気論は王陽明の「心本論」

に転向していた。また、王陽明の「理気一元論」と朱熹の「理気二元論」を同時に批判していた。

第二章は、林羅山の心性論である。「心」「理」「性」「情」の概念を分析し、羅山の心性論と朱熹・王陽明の心性論を比較して研究した。羅山が王陽明の「心即理」の心本論に転向した過程はその理気論の転向と通じている。心統性情、人心と道心などの思想は朱熹と異なる。また、朱熹の「性即理」を認めていたが、人と物の性は同じで、その理も同じだと考え、朱熹の説に反対していた。

第三章は、林羅山の工夫論である。「格物」と「敬」を中心に、羅山と朱熹・王陽明の工夫論の異同を論じた。羅山は朱熹の「格物窮理」説を認めていたが、「物」と「事」が「虚」と「実」の異なる性質を持つていると考え、朱熹の説とは異なる。敬の定義、敬と心との関係などは、朱熹の説を受け継いだ。また、王陽明の「居敬窮理」説を継承していなかったが、敬と心との関係を強調しており、王陽明の「心本論」の影響を受けた可能性がある。

第四章は、林羅山の神道論である。吉田兼俱の神道論、朱熹の鬼神論を論じ、神道文献の解説を通じて羅山の神道に対する儒学的解釈を分析した。羅山は日本が神国であることを強調し、仏を天竺の鬼であると貶め、両部神道以降の本地垂迹説を批判していた。神理、神道Ⅱ王道、神道Ⅱ儒道などの説は原始儒学、朱子学、中世神道の影響を受けていた。特に「神理」という説を提起しており、これは朱熹の「神は気の変化である」の説と異なる。「心は神明の舎なり」の説は吉田兼俱の影響を受けていた。

第五章は、林羅山の排仏論である。経済面、社会倫理、学理を中心に、羅山の排仏論と朱熹の排仏論の異同を分析し、両者の生涯と社会背景の視点から、両者の排仏論の差異が生じる要因を指摘した。羅山の排仏論では、経済の面で仏教が寺院や仏像を建造して社会経済に悪

影響を与え、社会倫理の面で仏教が人々の道徳や社会秩序を破壊し、学理の面で仏教の虚偽を批判し、仏教徒が理を知らないことを指摘していた。羅山は「従俗の論理」に従い、剃髪せざるを得なかったが、その排仏論はその朱子学的な異学排斥の最も重要な思想として、少しも動揺していなかった。

第六章は、林羅山の排耶論である。羅山と不干斎ハビアン論争と江戸幕府のクリンタン排撃に注目し、羅山の排耶論を二つの時期に分けて研究した。羅山の前期排耶論は主に朱子学の視点によってキリスト教教理を批判していた。しかし、キリスト教の教理に対する理解が不十分であるため、このような批判にはよほど効力がなかった。羅山の後期排耶論はキリスト教の社会的影響や教理を批判していた。ある程度幕府の禁教体制の影響を受けていた。

終章の第一節は羅山思想の特質である。本論文の論述をまとめ、羅山思想の特質を規定した。羅山の「朱子学」の特質は、朱子学に陽明学を折衷したところにある。また、羅山の異学排斥の特質は、仏教とキリスト教に対抗するため、朱子学を神道とを結び付けようとしたことにある。第二節は今後の課題である。羅山の「朱子学」とその日本近世の諸思想への態度の中で、本論文では論じられていない研究価値のある部分を略述した。